



『ラ・シルフィード』でのクセニア・リジュコヴァ Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

ボリショイ・バレエ学校

モスクワのボリショイ劇場で行われた卒業公演について
エマ・マニングがお伝えします。

ロシア人以外がボリショイ・バレエ学校の正規カリキュラムで学ぶことなど、十年前には想像もできなかった。だが世界は変化し、モスクワ国立振付アカデミー(同校の正式名称)は今、積極的に外国人留学生を受け入れている。

設立1773年。ボリショイの元バレリーナで現在校長を務めるマリア・レオノワは、同校の教育の本質は、「イタリア派、フランス派といったさまざまなメソッドを取り入れ、改良して、ボリショイ独自のスタイルを作り出してきた点にある」という。「私たちはこのスタイル、つまりロシアの伝統を長年にわたって守りつつ、ダンサーや振付家の変化や向上に合わせて、進化してきたのです。」そして国際化した今でも、踊るダンサーたちを見ればボリショイ出身者は立ちどころにわかるという。「ロシアのダンサー特有の強い感情表現力があるので。」

入学志望者を審査する際には、古典バレエに習熟できそうかどうかをまず重視するという。身体条件としては「首が長く、頭があまり大きく重くないこと」が望ましい。またスリムな体型を維持することも求められ、体重が増えすぎた生徒は退学させられる。「もちろん完璧な条件の生徒ばかりではありませんが、私たちは完璧に向けて渾身の努力をするのです。」

ダンス・クラシックのクラスのヴェラ・クリコヴァ、ナタリヤ・ヤスチェンコヴァ、イリヤ・クズネツォフ、オリガ・ポポヴァのクラスを見学したが、高い完成度に驚かされた。レオノワの言葉通り生徒たちのターン・アウトは皆180度で、アダージュは息を呑むほどよくコントロールされて滑らかだ。ロン・ド・ジャンプは非常に遅

いテンポで行われ、まるで空気を乱さないように心がけながら脚を動かしているようだった。クリコヴァのクラスでは、とある将来性豊かな15歳の生徒に目が釘付けになった。またポポヴァのクラスのある少年が「憧れのダンサーは、デヴィッド・ホールバーグ」と話してくれたのには、微笑ましくも新鮮な驚きを感じたことだ。

成川さくらは、日本で師事していた千野真沙美(元ロシア・バレエ団)にロシア留学を勧められ、3年前からここで学んでいる。モスクワに来てみて日露両国の文化の違いに驚いたが、「一番の問題は言葉で、最初は一言もわかりませんでした。ゼロからキリル文字を習い、ロシア語を学んできました。」ボリショイ・バレエ学校では、外国人留学生全員を対象にロシア語クラスを開講し、彼女も今では流暢にロシア語を話す。「ここで一番身についたのは、ロシア流の上半身の使い方と感情表現です。日本にいるときは、苦手だったんですが。クラスのレベルも、こちらの方がずっと高いです。」

卒業公演は、新装なったボリショイ劇場の巨大なステージで行われた。幕開きは『バキータ』よりグラン・パで、卒業学年のアメリカからの留学生ジョイ・ウォマックとマリオ・ラブラドーが主役を務めた。ウォマックには並はずれた天賦の才があり、クリーンな技術と上体の愛らしさがみごとに融合している。フェットの際に力まずにポワントに上がって、やすやすと回転するのも眼に快かった。

第二部は、まず生徒のドミトリ・アンティポフが振り付け、エリザヴェータ・ムラヴェヴァとアレクセイ・ドピコフが出演した『スマート』、続いてアナスタシア・リメンコとヴラディスラフ・コズロフによる『くるみ割り人形』のグラン・パ・ド・ドゥ。リメンコは小柄だが、プロポーションがよくたいへんチャーミングで、常に正しいポジションを当たり前のように取れる。パートナーのコズロフはサポートもよく力強い踊り手。長い手足をまだ持てあましているように見える部分もあったが、ダンスール・ノーブルとしての資質を強く感じさせた。

公演を締めくくったのは、この日がお披露目の二作品。まずはV. ティホミロフ振付の『ラ・シルフィード』パ・ド・ドゥで、ジュテの連続の間空中に浮いているように感じさせるクセニア・リジュコヴァが、アレクサンドル・オメルチェンコを相手に踊った。そして最後は、アメリカ人振付家のロバートソン三世・クロード・デイヴィスの『スティル・ポイント・イン・ア・ターニグ・ワールド』、出演者が楽しんで踊っているのが伝わってくる、生き生きとした作品だった。(訳:長野由紀)